

配置図及び各建物の歴史的価値等

旧森家住宅（施設名未定）に関するサウンディング型市場調査参考資料



主屋
(木造 2 階建、切妻造、本瓦葺、平入)
正確な建築年代は不明だが、文書などの資料からおおよそ江戸後期末と判断される。本瓦葺の切妻造で側面を漆喰塗とし、広い通土間や小屋組の登り梁の形式など、内子町六日市の江戸時代の特徴を残し、江戸時代の内子町の町家の主屋の建築様式を知ることができる。近代になってからの 2 階の居室化及び座敷の発達を示すこと、八日市の伝建地区の建物と同様に六日市の江戸期の町家主屋としても歴史的価値が高い。



燃料蔵
(塗屋造、木造平屋建、南側寄棟造、北側切妻造、棧瓦葺、平入)
材の風食や形式から、明治後期から大正期の建築と考えられる。周囲を塗屋造の形式として丁寧な造りをみせる。炭などの燃料を備蓄するなど、近代以前の普段の生活に欠かせない建物であったと考えられる。



客座敷
(木造 2 階建、切妻造、棧瓦葺・本瓦葺、平入)
客間棟、玄関棟、付属棟の 3 棟からなり、慶応 2 年には客間棟、玄関棟が建ち、その後まもなくして付属棟が建ったと考えられる。森家の主屋とは独立した客座敷として、鞘の間を設けるなど極めて質の良い接客空間を造り、当時の森家の地域における役割と繁栄を表した建物。玄関棟には隠居部屋等に使われたと考えられる家族用の居室を 2 階に設けており、充実した豊かな生活空間をもっていたと考えられる。



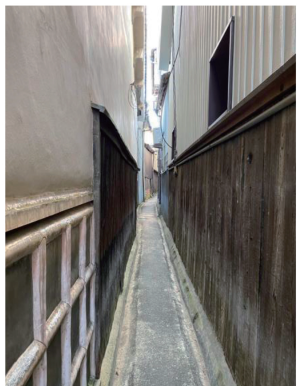
庭
枯山水の庭をもつ。客座敷からの眺めがよく、また対角線上に茶室を設け、充実した接客空間を創出している。江戸後期から明治・大正期にかけて発展した煎茶文化の影響を受けていると考えられる。近世以前の縦長の町割りの中に、形式として商家としての空間と接客空間とが一体となって明確に残っているのはまれであり大きな価値。商家の発展を示す典型的な例である。



駕籠蔵
(土蔵造、木造 2 階建、切妻造、本瓦葺、平入)
建設当初からの大きな変更は認められない。季節によって取り替える建具や接客用の陶磁器や飾り雛などの貴重品が箱詰めして置かれ、道具蔵として機能していたと考えられる。建築年代は明治 10 年代とされる。裕福な商家など、経済力のある質の高い家には必ず供えられ、森家の経済的な繁栄を示す。

せだわ（路地）

敷地は間口が狭く奥行きが長い長方形の形状とし、近世以前の町割りの特徴を見せる。東側に幅約 1m 前後の路地が通り、敷地北西側の中町通りまで抜ける。これを内子地区では「せだわ」と呼ぶ。敷地に連なる建造物によりせだわを形成し、これも近世以前の町割りの特徴の一つである。



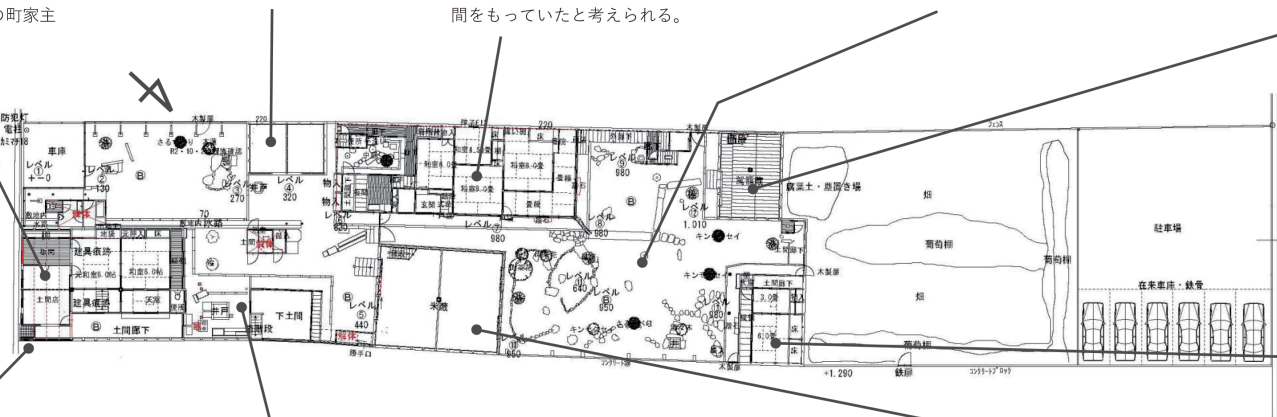
下土間

(木造 2 階建、切妻造、棧瓦葺、妻入)
井戸屋形と物置の 2 棟に分かれ、井戸屋形は主屋とほぼ同時に江戸後期末に建設されたと考えられる。主屋の当時の生活の一部を支えた。物置も井戸屋形建設直後に建てられ、当初は居室の一部として使われ、当時の生活の空間の拡大を担ったと考えられる。



米蔵

(土蔵造、木造 2 階建、切妻造、棧瓦葺、妻入)
主屋の後方に建ち、物資の出し入れなど、主屋の通土間との繋がりが想像される。規模が極めて大きく、森家の経済的繁栄を表す。日常の米の収納にこれだけ広い蔵は不要であるから、商売のための米の収納場所として機能していたと考えられる。近代に米蔵として使われたとの伝聞があり、森家が近代になっても米を扱っていたと推測できる。建築年代が文政 4 年と比較的明確に分かり、森家の建物の建築年代の推測の指標となる。



茶室
(木造平屋建、切妻造、棧瓦葺、妻入)
昭和前期に森家の敷地内では最後に建設されたと考えられる。2 つの釜跡が残り、茶室専用の建物として建てられたであろう。前面に造成された枯山水をもつ庭など充実した接客空間を創出し、森家の繁栄が昭和の前期まで続いたことを表していると考えられる。